

## 検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年9月29日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No.154】

### 革マル派内部抗争にJR総連関係者が深く関与！

前号に続き、JR内革マル派と革マル派中央との対立の記載について、「JR革マル派43名リスト裁判」でJR総連側が2010年6月30日に提出した準備書面に基づき検証する。宗形明著「異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌」(高木書房)にも、この部分に関する詳しい記載があるので紹介したい(p.24~)。

平成4(1992)年ごろから平成7(1995)年ごろにかけて、いわゆる「沖縄革マル組織問題」をめぐり、革マル派は党中央、沖縄革マル派、JR革マル派が三つ巴になって組織大混乱を起こし、“同派結党以来最大の危機”に陥った。公安警察筋の情報によると、そもそもの原因というか、その背景には、労働戦線における「松崎路線」への評価の問題があり、平成元(1989)年、革マル派は春闘勝利労働者総決起集会を開催、党中央が“組合主義的傾向”を払拭するためにいわゆる『3.5提起』を行ったことに端を発したのだが、これに伴い、革マル派沖縄県委員長Mの指導方針が中央指導部から全面否定され、県委員長を解任された上、軟禁状態でその責任を追及されるに至って組織逃亡(平成6(1994)年)に及んだり、この間、党中央がMに代わる指導者を沖縄に派遣したが、N(全軍労)以下の沖縄県委員会指導部の大半が党中央に反発する行動に出るといふ由々しき事態となってしまった。そこで、議長・黒田は、事態收拾のために、中央労働者組織委員会から国鉄出身の「トラジャ」2名(上野孝、浅野孝)を沖縄に派遣した。ところが、いわゆる「ミイラ取りがミイラに...」で、上野、浅野の両名はN以下地元幹部の主張に同調、また中央に残っていた他のトラジャ(「国鉄改革」に際して松崎がJR革マルから選抜して党中央へ送り込んだものと言われる「“トラジャ”(土方)」は、当時、上野と浅野を含め7名前後であった模様も、この動きに加担するようになった上、トラジャ指揮下にあるJR産別指導部「マンガローブ」をも巻き込み、“反・党中央”意識を煽り、機関紙「解放」の購読拒否やカンパの上納凍結などの事態にまで発展してしまった。このような過程で、黒田が上野孝と電話で話し合うが、上野は黒田の言うことを聞かなかったり(平成5(1993)年8月末)、黒田の辞任を要求する文書が関西方面から解放社に届いたり(同年11月上旬)、“トラジャ会議”が開かれ、「党中央がJR東労組と沖縄県革マル派との交流を妨害したこと」への抗議として、「東労組本部として、ボーナスカンパを凍結する」ことを決定したり(同年11月末)、JR東労組本部と東京地本が年末カンパを凍結(同年12月11日)、JR東労組新潟地本と高崎地本が年末カンパを凍結(同年12月12日)したり、など、様々なことがあったようだ。...(中略)...その後、党中央がトラジャ・浅野孝、上野孝、神保順之の3名を“拉致監禁”したり、浅野孝が“組織逃亡”したり、JR革マル派が「桜島作戦」と名付けて“上野孝と神保順之の奪還計画”を練ったり、などスリラー小説もどきの異様な話が多々伝えられている...(後略)...

#### 水面下で革マル派グループが蠢くJR総連！これがまともな組合か？！

この記載内容も、JR総連側の準備書面の内容と符合する。革マル派沖縄県委員会と革マル派党中央との対立や、本情報でも検証してきた国鉄出身のトラジャである浅野氏、上野氏、神保氏の沖縄への派遣や、その後の拉致監禁事件などは間違いなく事実であろう。本情報「No.129」「No.150」にも記載したが、浅野氏、神保氏は、現在、「国際労働総研」の主任研究員を務めている。JR総連は、これら当事者から、過去の革マル派との関係について、詳細に事実関係を公に説明させるべきことは当然だ。JR総連では、水面下で革マル派グループが蠢いていたのである。とてもまともな労働組合とはいえないだろう。